発達理論の学び舎

Back Number: Vol 169

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

3361. 三つの夢の場面

3362. 夢の対象化による解放とウィルバーの書籍

3363. 確率的な波としての意識構造

3364. 様々な種類の還元主義

3365. 自己の深まりと諸々の読みたい書籍

3366. 空に浮かび上がる夢

3367. 夢の続き

3368. 基礎構造と移行構造:対話実践の意義

3369. 協働プロジェクトへの期待

3370. 音の立体感の創出に向けて

3371. 最終原稿の加筆修正

3372. 原稿のレビューを終えて

3373. 唯一無二性

3374. 病理的な移行構造が投影された夢

3375. 精神病質的側面の治癒と統合

3376. 新たな道

3377. 二つのレビューの完成

3378. 歓喜の表現で目覚める夢

3379. 夢の振り返り

3380. ベルギー訪問計画の芽生え

© YOHEI KATO 2018

3361. 三つの夢の場面

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎてから一日の活動を開始した。起床と共に、今朝方の夢について少しばかり振り返っていた。

夢の中で私は、ある日本人の著名な科学者と話をしていた。その方に自分の専門分野を伝え、どのような研究にこれまで従事していたかを説明したところ、その科学者の方は最初はあまり関心を持っていないようだった。しかし、私が徐々に自分の研究の背景にある科学分野を説明すると、その科学者の方はだんだんと私の研究に関心を持ち始めた。最後には、その方は目を大きく見開いて、幾分前のめりになる形で私の話を聞いていた。そのような場面を覚えている。

もう一つ覚えている場面としては、フランスかどこかの国の岬にいたことだ。その岬には二階建ての家を改修したレストランがあった。私が住んでいる場所からこのレストランまでは歩ける距離だ。岬の上に立つこのレストランの周りには、他の建物は一切ない。

レストランの前に到着すると、何人かの団体がレストランの外側にある階段を使って二階に上がっていく姿が見えた。この階段は不思議な作りになっており、それは確かに階段のように見えるのだが、梯子を登るように上へ上がっていかなければならない。

その団体の後ろを追いかける形で私も上へ登って行った。すると私の後ろから、一人の青年がレストランの二階に向かっていることに気づいた。その顔はどこかで見覚えがあったから、私はその場で止まり、その青年がやってくるのを待った。実際のところは初対面なのだが、どうも初めて会ったとは思えない雰囲気をその青年が発しており、そこで立ち話を少々した。

どうやら彼は、私の家の近くに住んでいるらしい。しかし、このレストランに来るまでの道のりを聞いてみたところ、随分と遠回りをしていることに気づいた。そのため、私はもっと近い道があることをその青年に教えた。そこで夢の場面が変わった。

それらの夢について振り返っていると、最初に見た夢の場面は上記のものとは違うことに気づいた。最初の夢の場面は、巨大な敷地内に無数の日本人が収容されている夢だった。その敷地の周りに

は鉄格子が張り巡らされており、さらには監視塔のようなものも複数ある。私はその敷地内にいて、他の多くの日本人と同様に、収容されている一人だった。

この場所を管理している人間が全てドイツ人であり、どうやらそこはナチスの収容所であることが徐々にわかってきた。それがわかった後も、私の心は極めて冷静であった。

私の目の前には長い列があり、そこで多くの人たちが頭を坊主にするのを待っているようだった。列の先には、バリカンを持ったドイツ人が何人もいて、列に並んでいる人たちが次から次に坊主頭になっていく姿を列の後ろから眺めていた。

私の番が近づいてくると、私の近くに、中学校時代の数学の先生が立っていることに気づいた。先生に声をかけてみると、今置かれている状況をなんとも思っていないかのように、笑顔で私に色々と話をしてくれた。そうこうしているうちに、いよいよ私の断髪の番が近づいてきた。すると目の前に、小中高時代からの付き合いのある親友が立っていた。見ると、彼は巨大化しており、人間二人分の大きさになっていた。その巨大化した彼が、バリカンを持つ男に近づいていき、バリカンを持っている男は表情を一切変えずに、梯子を使って友人の頭を坊主にした。

この収容所では不思議なことに、管理する側も管理される側も、皆一様に無感情のようだった。管理をしているドイツ人は横暴なことは一切なく、至って穏やかであり、収容場内の日本人は一様に冷静であった。いやそれは冷静というよりも、自分が置かれている状況を理解していない無知から生まれる平穏さだと言った方がいいかもしれない。目の前の友人の最後の髪の毛が剃り落とされた時、次は私の番だったのだが、私はもう一度数学の先生と話をするために列の横に外れた。

バリカンを持つ男たちも、列に並んでいる人たちも私の行動を気にする様子は一向になく、断髪の作業は淡々と進んでいった。列の横に外れた私の心の中には、やはりこの場所で行われていることは異様であり、坊主頭にされることを拒否しようとする気持ちがあった。そうした気持ちが私を列から外れさせ、その口実としてもう一度先生と話をするという行動に向かわせたのだと思う。再度先生と話をしていると、収容場内にアナウンスが流れた。それは収容場内の全ての日本人を解放するという内容だった。先ほどまでは無表情だった多くの人たちの表情は晴れ渡り、解放から生まれる嬉しさの感情が収容場内に溢れていた。

© YOHEI KATO 2018

私は、髪を断髪した後に通される門の向こう側に歩いていくと、そこでは坊主頭の無数の人たちが、歓喜に沸く表情を浮かべていた。ふと空を見上げると、快晴の空が広がっており、自分の心もどこか晴れ渡るかのようであった。フローニンゲン：2018/11/6（火）06:52

No.1388: Celebration for Deep Autumn

Trees with red leaves are trembling gently in the wind. I can hear a birdsong. Autumn became deep. Groningen, 08:32, Wednesday, 11/7/2018

3362. 夢の対象化による解放とウィルバーの書籍

今朝方の夢について書き留めた後、夢を対象化したことによる自己解放のようなものが起きていることに気づいた。端的には、何かしらのシャドーの表れとしての夢を対象化することによって、シャドーの解消が生じ、心的空間に新しいスペースが生まれたような感覚がある。実際に、収容場に関する夢の中では、大きな解放感を感じていたことを覚えている。それにしても、あの夢の場面で見ていた光景、および感じていた事柄は言葉を超えたものがあることを思い出す。

不気味ではないことが不気味であるというような感覚。あそこにいた人々は、管理する側もされる側も一様に、自然な振る舞いをしていた。しかし、その自然さがとても不自然に感じているのは私だけだったのかもしれない。収容場内に解放のアナウンスが流れた時、人々はようやく自分たちが拘束されていたことに気づき、それと同時に解放の喜びを味わうという奇妙なことを経験していたに違いない。

この夢を一つの社会モデルと見立てるならば、私が日本社会に感じている違和感はここにあるように思えてくる。自然な振る舞いが不自然に思え、束縛されているのにそれに無自覚であるということが、そうした違和感を生み出しているようだ。もしかすると、これは日本社会に対してだけではなく、現代社会全般に対して自分が感じていることかもしれない。

時刻は午前七時を回った。これからまずは作曲実践を行う。その際にはバッハの四声のコラールを参考にする。昨日は、二つのコラールを参考にしたが、今日は通常通り、一曲だけ参考にする。作曲実践が終わったら、今日も旺盛な読書を進めていく。まずは、イギリスの宇宙物理学者ロジャー・ペンローズの書籍を読んでいきたい。昨夜、ペンローズの“The Emperor’s New Mind: Concerning

Computers, Minds, and the Laws of Physics (1989)”と“Shadows of the Mind: A Search for the Missing Science of Consciousness (1994)”を本棚の中から見つけ、それらの二冊については随分と前に購入していたにもかかわらず、まだ全体を通して一度も読んでいないことに気づいた。今日はまずそれらの二冊を読み進めていく。

ペンローズの書籍を読み終えたら、昨日に引き続き、ケン・ウィルバーの最新刊“The Religion of Tomorrow (2017)”を開き、関心のある箇所を中心に読み進めていく。特に、ティールやターコイズなどの第二層の意識段階の精神病理、さらには第三層の意識段階の病理についての説明を読み進めていこうと思う。

そこから、ウィルバーの他の書籍を参照する形で、ウィルバーの理論モデルにおける高度な意識段階の特徴を改めて確認していこうと思う。昨日に芽生えた予感として、手持ちのウィルバーの書籍をここでもう一度全て読み返すことが必要だというものがある。抜け漏れてしまった知識、当時理解できなかった事柄などが多数あるであろうから、今日からしばらくはウィルバーの書籍を読んでいくことにしたい。今がそれを行うにふさわしい時期だと感じる。フローニンゲン：2018/11/6（火）07:10

No.1389: A Dance of Sesame

In the morning I was reading a couple of books of Ken Wilber, Stuart Kauffman, and David Bohm. After lunch, I’ll continue to read Bohm’s book first and then Wilber’s books. Groningen, 11:49, Wednesday, 11/7/2018

3363. 確率的な波としての意識構造

時刻は午前11時を迎えた。昨日と異なり、今日は快晴であり、風もほとんどなく、とても穏やかな一日である。

早朝、息を呑むような美しさを持つ朝焼けを見た。薄い雲に朝日が反射し、それが赤紫色に輝いていたのだが、これまであまり見たことのない色であったため、しばらくその光景を眺めていた。それは今から数時間前のことである。

これまでのところ、午前中はロジャー・ペンローズの二冊の書籍に目を通し、その後、ケン・ウィルバーの書籍“The Religion of Tomorrow (2017)”に目を通していた。特に、ウィルバーの書籍の注記を読み進めることを行っていた。ウィルバーの発達理論は、ロバート・キーガンやスザンヌ・クック=グロイターの発達モデルと同様に、意識の重心という発想に重きを置くものだと思っていたのだが、注記をよくよく見ると、意識構造を「確率的な波」だと見なしていることがわかった。

以前からその言葉をウィルバーが用いていることは認識していたが、ふとしたきっかけで今日その意味が掴めた。この概念はもちろんウィルバーの推論的なものなのだが、それが意味することは、私たちの意識構造は主たる段階の前後を含めて、まるで波のように自由に動く余地があるということだ。

キーガンやクック=グロイターの発達理論においては、彼らは意識の重心という言葉を明示的には用いていないながらも、私たちは一つの発達段階に重きを置き、それを通じてこの世界を生きていると想定している。ウィルバーが意識構造を確率的な波だと見なしているのは、置かれている環境がまるで確率のように様々に変化するのと同様に――あるいはそれに応じて――、私たちの意識構造も様々に変化することを念頭に置いているからのようだ。

本書の中でも、ウィルバーは意識構造と意識状態は不可分に結びついていることを指摘しており、「確率的な波」という考え方は、どちらかというと意識状態の特質に当てはまるように思いがちだが、意識構造は意識状態の性質と密接に関係しているがゆえに、まるでそれが意識状態のように変化する点を認めている。

一方で、ウィルバーの発達理論は、意識の重心という発想に縛られたものではないが、その考え方を認めているのは確かだ。しかし、ウィルバーの認識は、キーガンやクック=グロイターたちの考え方と若干異なっており、意識の重心というのは、現在の自分の意識段階そのものというよりも、その段階以下の段階特性を認識する範囲を規定するものだと見なしている。端的に述べると、意識の重心は、自分が認識できる意識段階の範囲を規定するものとして存在しているとみなすのがウィルバーの考え方だということが見えてきた。この点については注記の中で議論されているように、かなり細かな話であり、若干複雑な論点であるため、何回か繰り返しこの箇所を読んでいこうと思う。

© YOHEI KATO 2018

また、そもそも確率的な波そのものが何に規定されるものなのかについても考えを巡らせようと思う。上記の概念を含め、ウィルバーが提唱する概念のいくつかは推論的かつ比喩的なものであり、それを事実として即座に受け入れることは賢明ではない。ただし、そうした推論的・比喩的な言葉の意味を考えることは、人間発達における隠れた現象を理解していくことに有益だろう。フローニンゲン:2018/11/6(火)11:25

3364. 様々な種類の還元主義

時刻は午後の八時半を迎えようとしている。振り返れば、今日も非常に充実した一日だった。探究活動に関して言えば、やはり何を読むかはその日に決めるのが一番望ましいように思えた。その日に本棚の前に立ち、その瞬間に読みたいと思う書籍を読んでいくことが、結果として関心の度合いを高く保ち、それが結果として高い集中力を持った読書を可能にしていく。

今日は特にケン・ウィルバーの書籍を何冊か読んでいた。その際には、本文を読むというよりも、注記を丹念に読んでいた。ウィルバー自身が述べているように、ウィルバーの書籍は本文以上に、注記の方が重要な事柄を述べていることが多い。

もちろん、注記に記載されていることはかなり応用的な内容になるのだが、この八年間ほどウィルバーの理論と付き合い、さらにはジョン・エフ・ケネディ大学で在籍していた統合心理学科は何を隠そうウィルバーの理論に基づいて作られていたため、ウィルバーの理論との付き合いはとても長い。そうした下積みがあるおかげで、ようやく注記を丹念に読み進めていくことが可能になっているのかもしれない。

以前、発達段階と時間の関係性について日記で書き留めていたが、まさにウィルバーも同様のことを指摘していることに本日気づいた。これまで認識上の盲点があったのか、ウィルバーの主著の二つである“The Atman Project (1980)”と“Up From Eden (1981)”の中に、そのテーマについて詳しい解説があるということに本日気づかされた。繰り返し読書をする意義の一つがまさにここにある。初読や再読の時には理解できなかったことや見落としていたことに、三読目以降に気づくことは頻繁にある。そもそも、初読から次にその書物を読む時までに、自分自身が何かしらの変化を遂げて

いるはずであるから、次にその書籍を読む際に新たな発見があるのは当然である。明日もそうした発見が豊富にあるだろう。

今日は午前中に、イギリスの物理学者であるロジャー・ペンローズの書籍を二冊ほど読み進めていた。確かに本書の中には面白い事柄もあったことは確かだが、ペンローズの採用する観点が物理学に縛られ過ぎており、時折窮屈さを感じていたのも事実である。ウィルバーの言葉で言えば、ペンローズの書籍で採用されているアプローチは「粗大な還元主義」と呼ばれるものだろう。それは、リアリティの全ての現象を物質的な事柄（原子、素粒子、ひもなど）に還元する発想を指す。

その他にも「微細な還元主義」というものも存在しており、これはシステム理論や複雑性科学のコミュニティーが陥りがちな発想であり、全ての現象をシステム的な観点で捉えようとする発想を指す。私自身もこの数年間は複雑性科学、とりわけダイナミックシステム理論を活用するコミュニティーに所属していたため、そこで蔓延している発想が何であるかはよく分かる。

どちらの還元主義にも共通しているのは、現象を三人称言語だけで記述しようとすることである。その他にも、ウィルバーの四象限モデルを活用してみた際に、特定の象限だけに焦点を当てていることも別種の還元主義に該当する。こうした諸々の還元主義は、日常様々ななところで見かけることができるだろう。そこで展開される主張が還元主義的なものに陥っていないかどうか、そして自らの観点や主張が還元主義的なものに陥っていないかを確認することは大切だろう。フローニンゲン：2018/11/6（火）20:40

3365. 自己の深まりと諸々の読みたい書籍

今日は早朝に美しい朝焼けを見て、夕方には美しい夕焼けを見た。特に、夕方に見た夕焼けは、希望に満ちた明日を呼んでいるかのように目に映った。フローニンゲンのこの季節は、美しい朝焼けと夕焼けの双方を頻繁に見ることができる。明日以降は、朝焼けと夕焼けの双方を意識的にゆっくりと眺める時間を作りたいと思う。

自分の認識世界が深まっていくことに合わせて、単純に諸々の現象に対する知的認識が深まっているのみならず、感情的・感覚的認識も深まっているように思う。これがまさに包括的な発達と言われるものなのかもしれない。学術探究にせよ、作曲実践にせよ、そして組織との協働プロジェクトに

せよ、何をするにも自己の深さを要求されることを痛感させられる毎日だが、自己を深めていくことは本当に緩やかにしか進まないため、焦らず自己を深める歩みを継続していこうと思う。

明日もまた、その日に読みたいと思う書籍を読み進めていこうと思うが、おそらくケン・ウィルバーの何冊かの書籍を同時並行的に読んでいくことになると思う。現在、ウィルバーのある書籍の監訳の仕事をしており――実際に監訳の仕事が始まるのは来年の初旬。現在は翻訳者の知人が翻訳中――、そうしたことが間接的な影響を自分に与え、今積極的にウィルバーの書籍を読み返しているのかもしれない。

シュタイナーの思想に関する書籍、美学に関する書籍、教育哲学に関する書籍など、ちょうど未読の書籍を全て読み終えた今がウィルバーの書籍を再読する絶好の時期なのだと思う。この機会を逃すことなく、思う存分ウィルバーの書籍の再読を行っていきたい。

芸術教育に関する15冊ないしは20冊ほどの哲学書はまだ購入しておらず、それらは明日か明後日に購入しようと思う。イギリスかドイツのアマゾンを経由して購入しようと思っており、仮に明日か明後日に注文をしたとしても、書籍が届き始めるのはしばらく後のことになるだろうから、その期間にもウィルバーの書籍を読み返していくことができる。ジャン・ピアジェ、ジェームズ・マーク・ボールドウィン、ジョン・デューイ、ジェニー・ウェイド、ニコラス・ルーマンなど、その他の学者の名前を挙げればきりがないが、本棚にある書籍の中で再読をしたいものが沢山ある。

来年大学院に戻るかどうかはまだ決まったわけではいが、再び学術機関に戻る前に、自分が読みたいものだけを気の済むまで読んでいくということを行いたいと思う。それは充実した日々に不可欠な一つの実践である。フローニンゲン：2018/11/6（火）20:54

3366. 空に浮かび上がる夢

今朝は六時に起床し、六時半から一日の活動を始めた。起床してすぐに、今朝方の夢について振り返っていた。今朝方は複数の印象に残る夢を見ていた。最初の夢の中で私は、ある開発が進んだ島にいた。そこは経済的にもすでに発達しており、リゾート化が近年ますます進んでいるようだった。その島で私は何をしていたのか定かではないが、その島から元いた町に何かを届ける必要があった。

友人が小さな箱を私に渡し、それを町に届けることをこれから行おうとしていた。その島から大陸にある町までの交通手段はおそらく飛行機か船しかないのだと思うが、私は空を飛んでその箱を届けることにした。

すると友人が、「向こうの空に雨雲が見えるから気をつけて」と述べた。友人が指差す方向を見ると、確かに雨雲が発生している。だが、その雨雲よりも高く飛んでいけば何も問題ないと思った。いざ砂浜から空に向かって飛び立ってみると、その島の眺めはとても美しかった。

一方で、徐々にその島が見えなくなるほど空高く浮かんでみると、少しばかり恐怖心のようなものがあった。というのも、今回空を飛ぶ際には一つの風船を用いて、その風船を抱きかかえるようにして空に向かっていったからだ。

その風船から滑り落ちてしまうリスクがあり、その風船が割れてしまうリスクなどがあることを私は考えていた。そうしたリスクを考えながら、万が一風船から滑り落ちたり、風船が割れてしまったりした時のために、一瞬で膨らむ別の風船を用意していることを思い出した。

幸いにも、飛行は順調に進んでいき、友人が懸念していた雨雲の上を通り過ぎていくことができた。そろそろ町に降りる頃だと持って高度を下げていくと、陸地に到着するという安心感が芽生えてきた。もはや地上が見えなくなるほど高い場所を飛行していたため、地上に到着する安心感は格別であった。風船を抱えたままゆっくりと目的地に向かって下降していくと、到着した場所はアスレチックジムのようなところだった。

そこで夢の場面が変わった。一つ目の夢について考えみると、今回の夢は空を飛ぶことがテーマになっていたように思う。これまでも何度も空を飛ぶ夢を見ているのだが、夢によって飛行する高度が異なる。一方で共通しているのは、飛行に伴って何かしらの不安や恐怖があるということだ。

今回の夢は、随分と高い場所を飛行していたように思う。確かに空からの眺めは格別であったが、それ以上に、今回は風船を抱えたまま空を漂っていたということもあって、落下の危険性について少々不安な気持ちがあった。特に、地上の様子が見えるか見えないかのところまで浮上した時には恐怖心のようなものが芽生えていたことを思い出す。地上が見えない恐怖と、空しかない世界に包み込まれる恐怖のようなものがあった。

© YOHEI KATO 2018

そういえば、友人が雨雲の存在を指摘した時、雨雲近辺の空は気温が低いだろうと思い、半袖で空に浮上すると寒さが厳しいのではないか、と懸念していた自分がいたことを思い出す。幸いにも、夢の中の私は寒さを感じることもなく飛行を続けることができていたのだが、今回の飛行に関しては諸々の懸念がつきまとっていたことを思い出す。

空を飛ぶ時の自分の身体は、サトルボディに分類されるだろうが、ケン・ウィルバーがサトル意識を三つに分類していることを考えると、飛行に適したサトルボディは限りなくコーザルボディに近いものである可能性があるのではないかと思う。フローニンゲン：2018/11/7（水）07:00

No.1390: Sparkle of Holy Water

It seems to me that the flow of time looks like holy water, and I'm seeing the sparkle of it. I'll review the manuscript of my upcoming book from now. Groningen, 20:04, Wednesday, 11/7/2018

3367. 夢の続き

時刻は午前七時を迎えた。今朝も快眠を取ることができたため、早朝より心身の状態がとても良い。今日も探究活動と創造活動に旺盛に励むことができそうだ。

今、小鳥が鳴き声を上げているのが聞こえる。外はまだ暗いのだが、完全な闇ではなく、もう三十分ほどしたら随分と闇が晴れてくるだろう。今日も朝焼けが見えるのかどうかが楽しみだ。仮に朝焼けが現れたら、窓の近くから空を気の済むまで眺めようと思う。

今朝方の夢の続きについて再度思い出している。空を浮上する夢の後に見ていた夢の場面では、私はあるレクチャールームの中にいた。そこではこれから何かの授業が始まるようであり、部屋の中には10名ほどの成人がいた。彼らの国籍は様々であり、彼らの年齢などを考えてみると、どうやらそこは大学院のようだった。

部屋の中には大きなパソコンが四、五台置かれており、私たちはパソコンのモニターに面して座っていた。授業が始まる時間になっても担当教授が姿をあらわすことはなかったのだが、突然パソコンのモニターに何かのニュースが流れ始めた。それは特に重大なニュースではないように思えたのだが、その場にいた全員がニュースに釘付けになっている。すると突然、パソコンに異常が発生し、

モニター画面が点滅したり、画像が乱れたりし始めた。最後には、モニター画面が停止してしまった。そこで、部屋にいた一人の男性が教授を呼びに行くことを提案した。ところが、担当教授はそもそも夜の九時まで別の授業があることがわかり、私たちはその場であと一時間ぐらい時間を過ごさなければならないことがわかった。

その場にいた全員は至って冷静であり、どうやってパソコンを直すかを考えていた。すると一人の女性が、「数人が声を合わせてパソコンに呼びかけてみよう」と述べた。それは少し滑稽なアイデアのように思えたのだが、実際に数人が早速パソコンに呼びかけてみると、パソコンに光が点灯し、画像の乱れがなく、先ほどのニュースが再び流れ出した。それを見た他の人たちは歓喜の声を上げ、後に続くように、数人が一組になって他のパソコンに呼びかけていった。それが功を奏し、全てのパソコンが無事に復旧した。それを見た私たちは、一度休憩を取ろうということで、各自思い思いにトイレに行ったり、飲み物を買いに行ったりし始めた。

そこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、先ほどのレクチャールームがあった建物と同じ場所に私はいた。トイレを済ませた後に、元の部屋に戻ってみると、そこに二人の中国人女性がいた。彼女たちは机の上で、必死に何かをノートに書き込んでいる。二人に近寄って二人のノートを見ると、一人は文字のような文字ではないような記号を使ってノートに書き込みを行っていた。もう一人の女性は中国語でメモを取っていた。

私:「二人とも英語でノートを取ることをしないんだね」

一人の女性:「うん、ノートにメモする時は英語よりも中国語の方が楽なのよ」

二人が読んでいるテキストは英語で書かれたものだが、二人がそれぞれ異なるスタイルでノートにメモを取っていることは興味深かった。会話がひと段落したところで私たちは部屋を後にし、その際にはお互いに履修している授業について意見交換をしていた。

すると突然、二人の女性が高校時代の友人の男性に変化し、これから三人で近くのレストランに夕食を食べに行くことになった。二人ともこの辺りの土地勘がまだないようであり、また英語を話すことにも苦戦しているようであったから、比較的簡単に注文できるようなレストランを選ぼうと思ったが、

結局行きつけのレストランに行くことにした。レストランに到着し、そこで注文の仕方を示すかのように私が注文を終えたところで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/11/7（水）07:24

No.1391: Red Leaves Reflecting the Morning Sun

Looking at red leaves reflecting the morning sun, I'm feeling the beginning of a new day. I'll start to review the manuscript of my upcoming book. Groningen, 08:37, Thursday, 11/8/2018

3368. 基礎構造と移行構造：対話実践の意義

時刻は午前十時半を迎えた。紅葉をつけた木々が揺れ、小鳥の鳴き声が聞こえてくる。もう随分と秋が深まったことを感じる。

念のため今日の曜日を確認すると、今日は水曜日とのことである。今日は昼食後にオンラインミーティングが一件入っており、明日も一件同じ時間にミーティングが入っている。日々の諸々の取り組みが少しずつ前進している。

早朝にバッハの四声のコラールに範を求めた後に、久しぶりにウィルバーの“Eye to Eye: The Quest for the New Paradigm (1983)”を読み返していた。特に発達段階に関する説明を読み返していると、「含んで超える」という言葉について考えることがあった。結局そこでは何が含められ、何が超えられているのだろうか？という問いが現れた。端的には、そこで含められているのは既存の発達段階における「基礎構造」であり、超えられていくものは既存の発達段階における基礎構造以外の部分――ウィルバーはそれを「移行構造」と呼んでいる――である。

基礎構造というのは、その段階を特徴付ける最も重要な特質のことを指し、例えばキーガンの理論モデルでいうところの他者依存段階においては、二人称の視点が取れる性質のことを指す。逆に超えられていくものは、その段階における限界であり、それは二人称の視点が取れることによって生じる他者依存的な発想の枠組みなどである。

ウィルバーの喩えは面白く、ハワイがアメリカの州として合併された際にも、ハワイの土地そのものは基礎構造として残り続けているが、以前のハワイ王国が持っていた国としての権限――移行構造――

は剥奪され、その代わりにアメリカの州としての新たな権限が付与されたというのは、「含んで超える」という考え方における基礎構造と移行構造の性質を説明する上でとてもわかりやすいように思う。

ウィルバーの書籍を読み進めた後は、理論生物学者のスチュアート・カウフマンの“At Home in the Universe: The Search for the Laws of Self-Organization and Complexity (1995)”を読み進めていた。こちらの書籍に関しては、丹念に読むというよりも、目次や見出しを眺めることに留まった。一方で、その次に読み始めた、理論物理学者のデヴィッド・ボームの“The Essential David Bohm (2002)”は大変面白く、今も引き続き読み進めている。晩年、ボームは理論物理学の研究から意識の研究へと関心を移して行ったことは有名であり、私がジョン・エフ・ケネディ大学に在籍していた頃は、「ボームダイアローグ」というボームの対話に関する考え方が元になった実践技法を学ぶグループに所属していたことが懐かしい。

対話には創造的な力が秘められていることは、対話実践を行ったことのある者にとっては明らかだと思うが、ボームが考えていた対話実践の意義は、そうした創造的な力を用いて、社会を新たに形作っていくことであった。

社会を啓蒙し、社会の変容を促すための対話の実践で必要になるのは、「社会の暗黙的な構造」に光を当て、それを明るみにすることであるとボームは述べている。社会の暗黙的な構造というのは、端的には社会において触れられることのない思い込みや価値観といったものを指す。そうした目には見えない根強い構造を明るみにすることによって初めて、その構造への働きかけが芽生えてくる。これは社会の変容のみならず、個人の変容においても重要な考え方だろう。

個人にせよ、社会にせよ、暗黙的な構造というものが無数に存在しており、対話を通じてそれらに気づいていくことは、変容に向けた第一歩になるだろう。そしてそれは、あくまでも変容に向けた第一歩に過ぎないことを念頭に置いておく必要がある。フローニンゲン：2018/11/7（水）10:59

No.1392: A Drum Before Lunch

It is approaching noon. I was reviewing the manuscript of my upcoming book in the morning. I'll go to a supermarket from now. Groningen, 11:43, Thursday, 11/8/2018

3369. 協働プロジェクトへの期待

時刻は午後の六時に近づいてきた。今日は午前中に、ケン・ウィルバー、スチュアート・カウフマン、デイヴィッド・ボームの書籍を読み進めていた。特に、ウィルバーとボームの書籍から得るものが多く、本日読んだ書籍はまた繰り返し読んでいきたいと思う。

今日は昼食後に、オンラインミーティングを行った。今日のミーティングを受けて、また新たな協働プロジェクトが始まりそうであり、本件を進めていくことは非常に楽しみだ。そのプロジェクトが持つ社会的な意義を考えてみた時に、ぜひとも成人発達理論の観点から関与させていただきたいという思いが湧いてきたため、本件に関与させていただくことにした。今後何かしらのプロジェクトに参画する際には、兎にも角にもそのプロジェクトの社会的な意義と自分自身の関心の度合いを常に考えていきたいと思う。

ミーティングを終えた後、色々と調べ物をしている最中に、平成で年号が表示されると、それが西暦何年なのかがすぐにわからなくなっている自分がいることに気づいた。日本を離れての生活が長くなればなるほど、平成の年号表示を見る機会はほとんどないため、そのような状況に陥っているのだと思う。

明日も昼食後に一件ほどオンラインミーティングがある。オランダで生活をしている私には、もちろん物理的な制約があり、さらには個人的な探究活動と創造活動に日々従事していることもあり、時間的な制約の面で日本の組織との協働プロジェクトに全ての時間を充てることはできないが、それでも自分にできる限りの関与と貢献をしていきたいと最近よく思う。

明日はミーティング以外に行いたいこととしては、来年の一月に出版予定の最終原稿をレビューすることである。本日の朝に、協働執筆者の方から原稿が届き、いよいよ最後のレビューを行う。レビューに合わせて、以前に自分が執筆したコラムの加筆修正を行っていく。今回の原稿は、あくまでも編集者の方へ提出する前の最終稿に過ぎないが、それを提出したらそこからの作業はそれほど多くないだろう。分量としては15万字弱ほどあるので、数日間に分けて各章をゆっくりと読んでいく。ここから三日間ほど集中的に原稿を読み、日曜日にレビュー済みの原稿を協働者の方に送る。書籍の執筆、監訳、さらには協働プロジェクトに従事していると、あっという間に春がやってくるかも

しれない。来年の春は今年の春以上に実りの多いものであることを期待する。フローニンゲン:2018/11/7(水)18:02

3370. 音の立体感の創出に向けて

時刻は朝の七時に近づきつつある。今日は六時過ぎに起床し、つい先ほど一日の活動を始めた。起床してすぐに行う習慣であるヨガを行い、心身の状態を整えることによって、その日一日の活動が充実したものになることを実感している。今朝も質の高い睡眠が取れたという感覚があり、本日の活動も良好に進んでいくだろう。

昨夜、時の流れが聖水のように思え、その輝きを目の当たりにしているような感覚があった。その感覚を曲として表現しておいた。

今日も自分の内側では様々な感覚が生じるだろう。そうした感覚の中で形になることを望むものがあれば、それを形にしていく。曲として、そして絵としてそれを表現していく。絵に関しては、立体感を出すために、影を付ける技術を磨いていきたいと数日前に改めて思った。参考図書を探してみたところ、いくつか良さそうなものを見つけたが、実際に中身を眺める形で比較したいと思い、今はそれらの書籍を購入しないでいる。

オランダの書店に置かれている書籍は、当然ながらほとんどオランダ語であり、絵画制作方法に関する書籍もオランダ語のものの方が多いだろうが、近々近所の書店を二、三巡り、英語の書籍がないかどうか探してみる。

内側の感覚をデッサンする際に、影の技術を用いることによって、より立体感を持った形で表現出来ることは、また新たな充実感をもたらしてくれるだろう。仮に目星の書籍がなければ、インターネット上の情報を頼りに影を付ける技術を学んでいこうと思う。

絵画において立体感を出すのと同じように、作曲においても立体感を出すことはできるのかを考えていた。現代の物理学において、時間と空間は不可分の関係にあることを考えると、作曲においてそれを実現することは可能であるように思える。というのも、時間というのは音楽における不可欠な

要素であり、曲の中に時間が存在しているのであれば──あるいは、時間として曲が存在しているのであれば──、そこには何かしらの空間が存在していると考えるのも不自然ではないだろう。

もちろん、ここで述べている空間とは、物理的な空間というよりも、音楽的な空間と述べた方が正確だろう。音楽空間においてより立体感を出すにはどうしたらいいだろうか？それを可能にするのは、やはりハーモニー、メロディー、リズムといった曲の構成要素なのだろうか。おそらくここから考えていく必要があるのは、それらの構成要素をいかように生み出していくことが曲の立体感につながっていくのか？ということだろう。

直感的に一番重要なのは、ハーモニーの技術なのではないかと思う。なぜなら、ハーモニーの技術は、音程の異なる音同士を組み合わせて、それら部分としての音が持っている音感を超えて、新たな音感を持つ一つの全体としての音を生み出すからである。

ちょうど書斎の机の右隅には、ウォルター・ピストンが執筆したハーモニーに関する書籍が置かれており、それをこれから読む際には、「音の立体感を出すためのハーモニー」という意識を持って本書を読んでいこうと思う。

そもそも音楽は、楽譜上における音符の羅列は二次元的なものだが、それが演奏される瞬間に立体的なものになるという不思議な性質を不可避に内包している。これから曲を聴く際にも、作る際にも、各曲の立体感の質的差異に意識を向けていこうと思う。フローニンゲン：2018/11/8（木）07:11

No.1393: A Patrol of an Imp

Now it is the time when an imp starts a patrol. I'll stop today's activities and start to prepare for tomorrow. Groningen, 20:24, Thursday, 11/8/2018

3371. 最終原稿の加筆修正

時刻は午前九時を迎えた。早朝に、バッハの四声のコラールに範を求めて作曲実践を行った。その際に、曲が持つ立体感について少しばかり意識をしてみた。特にめぼしい発見はなかったが、曲に内包されている立体感については今後も意識をしていく。同時に、そうした意識をもとにして意

味のある洞察を得ていくためには観点が必要であろうから、観点を取得するために作曲理論に関する書籍、とりわけハーモニーに関する書籍を中心に読み進めていく。

今、フローニンゲンの早朝の空には雲が一つもなく、晴天が広がっている。朝日に反射する紅葉を見ながら、一日の始まりを感じる。

昨日の予定では、今日もケン・ウィルバーの書籍を読んでいこうと思っていたが、読書よりも先に、書籍の原稿のレビューを行いたいと思う。当初の予定よりも早く本書が出版されることになり、出版は来年の一月とのことである。協働執筆者の方が手直しをした最終原稿に対して、レビューと加筆修正を行っていく。昨日、第一章の冒頭から読み進めてみると、本書の物語に引き込まれていき、その後の展開が楽しみであった。

すでに何度も今回の物語を読んでいるのだが、修正された最後の原稿を改めて読むと、自分の中で新たな気づきが色々と得られる。昨日は特に、自分が執筆したコラムの加筆修正を行っていた。第一章のコラムは随分と前に執筆しているため、文章を寝かせることによって、また新たなアイデアが生まれていることに気づく。そうしたアイデアをもとに既存のコラムを修正していくことを今日も行う。

今日は昼食後にオンラインミーティングが一件あるが、それ以外は自由な時間であるため、今日は気の済むまで本書のレビューを行いたいと思う。今日の進み具合によっては、早ければ明日にはレビューが完了するかもしれない。本日中に書籍のレビューの大半を進めていき、明日は大学院の出願に向けた志望動機書のドラフトをレビューし、それをネイティブの友人に送る。この志望動機書に関しても随分と前にドラフトが完成しており、そこから何度も手直しを重ね、しばらく文章を寝かせていた。

明日にもう一度最初から最後まで文章を読み、必要な箇所を修正してから友人のカルムに送る。カルムのレビューを受けて、最後にもう一度自分でレビューをしたら、出願期限よりも早く全ての書類をオンライン上で出願先の大学院に提出しようと思う。全ての物事を着実に前に進めていく。今目の前で進行している季節のように。フローニンゲン：2018/11/8（木）09:20

© YOHEI KATO 2018

No.1394: The End of Dawn

Daybreak came, and a new day began. It seems that today is cloudy. Groningen, 08:06, Friday, 11/9/2018

3372. 原稿のレビューを終えて

時刻は午後の五時を迎えた。午前中から取り掛かっていた書籍の原稿のレビューが随分とはかどり、残りは二章分のレビューだけとなった。本日のレビューはここで止めにし、残りに関しては明日レビューをしていこうと思う。レビューの最中、今回の書籍の物語の世界の中に浸っている自分がいることに気づかされた。

物語の世界に入りながら、そうした自分に気づいているというのは、もしかすると物語の世界の外にいると言えるかもしれないが、自分の心が物語の世界の中にあったことは間違いない。午前中と午後の時間を使って、予想以上にレビューが進んで行ったのは、本書の物語が持つ力によるものかもしれない。

明日に残りの二章のレビューをすることができたら、いよいよ最終原稿の完成となる。協働執筆者の方に予定よりも一日早く原稿を渡せるかもしれない。あとは、協働執筆者の方に参考文献リストを完成してもらえれば、原稿は一旦完成となる。

今日のフローニンゲンの夕日は、エメラルド色に輝いている。雲が一つもない空が、何層かの色に分かれている。夕日が沈んでいく方向の空は薄くオレンジ色に輝いており、自宅の上空の空は薄いエメラルド色に輝いている。ひと時の間に見せる空の美しい表情を眺めながら、今日も非常に充実した一日だったと振り返る。

充実感ではち切れんばかりの毎日が続く。そうした毎日を送っていると、私はもはや充実感を持たなくなった。私は充実感となった。

今日はこれから夕食までの時間を読書に充てようと思う。その際には、ケン・ウィルバーの“The Eye of Spirit: An Integral Vision for a World Gone Slightly Mad (2001)”の注記を読み進めていこうと思う。ウィルバーの書籍の中には、注記だけで一冊の本になるものが多く、本書もまさにそうした一冊

だ。改めて本書の注記を眺めてみたところ、以前に半分ほど一読していたようである。以前本書を読んだのがいつなのか定かではないため、もう一度最初から注記を読み進めていこうと思う。夕食後には、ハイドンに範を求めて本日三度目の作曲実践をする。

最近は、活字世界に長居しすぎたと思ったら、積極的に音楽世界に移動するようにしている。作曲をした後には必ずその絵に対してデッサンをしているので、絵画世界に移動することも同時に行っている。複数の世界を移動することは、私の存在を包括的に支えている。それに加えて、そうした複数の世界の越境は、包括的に自己を育んでいることにも気づく。明日も今日と同じように、複数の世界を行き来しながら、自己をより豊かに育んでいきたいと思う。フローニンゲン:2018/11/8(木)17:16

No.1395: On a Calm Afternoon

It stopped drizzling. Now a very calm atmosphere is embracing Groningen. I'll go for a walk to go to my favorite cheese store. Groningen, 15:04, Friday, 11/9/2018

3373. 唯一無二性

時刻は午後の七時半を迎えようとしている。つい今しがた夕食を摂り終えた。ここ最近は毎晩、肉厚のサーモンを焼いて食べることが多かったが、昨日から別の種類の魚を食べることにした。オランダ語で表示されているので自分が何という魚を食べていたのか定かではないが、白身の魚だ。後ほど、そのオランダ語を調べ、昨日と今日食べていた魚の名前を特定したいと思う。

今日は午後に一度、自分の意識が飛んでいた。それは気を失うという意味ではなく、ふとした瞬間に、超越的な意識状態に参入していたということだ。その時の私は肉体としてはフローニンゲンにいたのだが、太陽系を超えて、銀河系まで意識が飛んでいた。そして、自分が人類史上の中で唯一無二の存在であることに気づき、同時代に生きている他の一人一人もそうだと思った。

人類の歴史が始まってから、人類が滅びるまでの過程において、自分と同一の人間は二度と現れないということ、そして自分の日々の一つ一つの体験が唯一無二のものであることを改めて知った。その気づきを得た時、私はフローニンゲンの自宅の書斎の中にいた。一人の人間の命や一生が尊

いというのは、おそらくその点にあるのだろう。人類の歴史が始まって、人類の歴史がいつか途絶える日までにおいて、自分と同じ人間は二度と現れないということ。そして、そうした自分が経験する日々の一瞬一瞬も唯一無二のものであるということ。そこに人間の尊さがあるように思う。それはおそらく人間のみならず、生物にも当てはまるだろう。さらには無生物にすら当てはまるかもしれない。

現代人の多くは、自分の存在や人生が唯一無二のものであることを忘れていやしないだろうか。それは今この瞬間の世界において唯一無二のものであるというだけではなく、人類の歴史が始まってから終わりに至るまでの全期間においてそうなのだ。

ここのところ、自己の唯一無二性を感じながら毎日の活動一つ一つに取り組んでいるように思う。端的には、「自分はそれをするために生まれてきたのかどうか」という問いが常に存在の内側に漂っており、私は毎日、唯一無二の存在である自分に与えられた──託された──取り組みだけに従事している。そう思えない活動には一切従事していない。なぜなら、それを行うことが自己という人間の尊厳を傷つけているように思えるからである。日々の生活の中で、何をしようにも、活動との一体化を絶えず感じているのは、そうした考えを持って毎日を生きているためかもしれない。

自己のみならず、自己を取り巻く遍く存在が唯一無二であり、そうした存在に溢れた世界の中で私は毎日生きているのだと思う。

辺りは真っ暗な闇に包まれ、明日への準備をし始めている。闇が闇だとわかった瞬間に、その闇は先ほどまでの闇ではなくなる。自己が自己だとわかった瞬間に、その自己は先ほどまでの自己ではなくなることに似ている。内外宇宙は絶えず小さな超越を続けている。フローニンゲン:2018/11/8(木)19:44

3374. 病理的な移行構造が投影された夢

今朝は五時半過ぎに起床し、六時を少し過ぎた頃に一日の活動を始めた。今は雨が降っていないのだが、早朝は少しだけ小雨が降るらしい。今、一台のバスが目の前の通りを走り去っていく音が聞こえた。今日も一日がゆっくりと始まった。

今朝方の夢について少しばかり振り返っている。夢の中で私は、学校の教室のような部屋の中にいた。そこには高校時代の知り合いが何人かいた。私たちは全員席に着き、教師の到着を待っていた。教師が到着すると、どこか見覚えのある顔だった。

教師が簡単に挨拶をした後に、早速その日の授業が始まった。なぜかその教師は私に突然質問をしてきた。

教師:「君には顧問弁護士はいる？」

私:「えっ？顧問弁護士ですか？特にいないと思います」

そのように私が答えると、教師は即座に「ここにいるじゃないか！笑」と教室の左隅に座っている男性を指して言った。教師の表情は笑顔であり、教室中も笑に包まれていた。しかし私は、何が面白いのかよくわからず、冷静に反応をした。

私:「いえ、その方には今後法律相談をすることはあるかもしれませんが、現在時点においてはその方は顧問弁護士ではありません」

私は教師が述べる「顧問弁護士」という定義が曖昧であることに疑問を持っており、その点を指摘した。すると教師はそこでまたいくつか言葉を述べた。その言葉の内容もどこか私を嘲笑しているかのようなものに思えたため、私は無言で教室を後にした。するとその教師も教室を飛び出し、私を追いかけてきた。

特に私は走って逃げるようなことをしていたわけではなく、ゆっくりと廊下を歩いていた。教師が何かを叫びながら追いかけてきていることは知っていたのだが、私は後ろを振り返ることなく、廊下の先をまっすぐに見つめながら歩いていた。するとあるところで、その教師の存在がとても邪魔なものに思えてきた。そのため私はその場で一度立ち止まり、右手に見えた教室の扉を開けて、その教室に入った。その教室には誰もおらず、明かりが消されており、とても暗かった。その状況を見たとき、私は「好都合だ」と直感的に判断した。その判断が生まれたとき、教師がその部屋に入ってきた。すると私は、その教師が一言も発せないぐらいに素早く何回も殴打をし、教師は地面に倒れ込んだ。倒れ込んだ教師は静かになっていたのだが、念のためにもう何回か頭を中心に踏みつけた。すると、

教師がもはや息をしていないことに私は気づいた。それに気づいても、私は一向に無感情なままで、息をしなくなった教師が地面に横たわっている姿を見ながら教室を後にした。そこで夢の場面が変わった。

その後にも何かしらの夢を見ていたことを覚えている。ただし、上記の夢がとても暴力的な内容であったため、その夢だけが強く印象に残っている。夢の中の私は、相変わらず言語的な発達が未熟であり、言葉で相手とコミュニケーションすることを苦手にしているようだ。何かを言われると、それに言葉で応答するのではなく、あるところで突然暴力に訴え、力で問題を解決しようとする傾向があるように思える。それは多分に幼少期の自分の姿と重なるかのようである。

数日前に読んでいたウィルバーの書籍の言葉を用いれば、夢の中に出てくるそうした自己の側面は、発達における基礎構造ではなく、移行構造であり、同時にその移行構造が幾分病理的なものになっていると言えるかもしれない。今朝方の夢に出てきた自己の側面との対話がどうやら必要のようであり、その治癒が求められているように感じる。フローニンゲン：2018/11/9（金）06:33

No.1396: A Lingering Scent of Light

Today looks like a ray of light, and the lingering scent is spreading out. Groningen, 20:41, Friday, 11/9/2018

3375. 精神病質的側面の治癒と統合

今朝方の夢の中に出てきていた自己の側面について、未だにそれが自己全体の中に健全に包摂されているとは言い難いが、着実にその存在への認識は深まってきている。夢の中で繰り返し現れる存在であるから、おそらく自分にとって非常に重要な意味を持っている存在なのだろう。

それにしても、その存在は他人を殺傷することに一切の感情を挟まないという点は、社会病質者（ソシオパス）というよりも精神病質者（サイコパス）のようであるといつも思う。そうした存在の治癒と自己全体への再統合は不可欠だと思うが、そうしたことを書くと、おそらくその存在はあまり良い顔をしないのだろうと察する。だからこそ、この問題はなかなか難しい。実際のところは、その存在を治癒す

る最良の手が何であるかは最近わかってきており、その手を打つことを今後は考えていく必要があるかもしれない。

それは直接的な手段であり、第二案として考えている手もあるのだが、それは幾分間接的であり、なおかつ時間がかかる。そしてそれは必ず、日本とは離れた場所で行っていく必要があるものだということも念頭に置いておく必要がある。

第三案は、日常的にそうした夢を見ている際に、夢を見ている自分がその存在に働きかけるというものである。夢を見ている自分は高度なサトルの意識状態にあるため、自己意識を介在させることは極めて難しいのだが、この方法もあることを書き留めておく。今のところは、日本を離れた場所で生活する中で、第二案と第三案をゆっくりと進めていくことが賢明かもしれない。

時刻は午前七時に近づきつつある。今日もまた、早朝の作曲実践から一日の活動を始めたい。実質上、一日の活動の始めに行っている実践はヨガであり、その次に行っているのは日記の執筆なのだが、作曲実践をすることによって一日が本格的に始まるといつも感じている。

作曲実践を終えたら、ケン・ウィルバーの“The Eye of Spirit: An Integral Vision for a World Gone Slightly Mad (2001)”の注記を読み進めていく。一時間ほどまずは読書をする。その後、昨日に引き続き、現在執筆中の書籍の原稿のレビューを行う。残り二章のレビューは本日中に終わるだろう。そうすれば、今日の夜に原稿を協働執筆者の方に送ることができそうだ。予定よりも二日早く原稿を渡すことができそうであり、それは今後の流れを考えると望ましい。

原稿のレビューと並行して、午後には、大学院への出願に際して必要な志望動機書の最終レビューを行う。一読後、スコットランド人の友人であるカルムにそれを送り、ネイティブの観点からレビューをしてもらう。今日もまた、着実に自分の取り組みを前に進めていくことができるだろう。フローニンゲン：2018/11/9（金）07:02

No.1397: Silver Rain

I heard a roar of thunder just now. It seems to start to rain. Groningen, 10:07, Saturday, 11/10/2018

3376. 新たな道

時刻は午後の四時を迎えようとしている。早朝に降り注いでいた小雨は昼前に止み、そこからは曇りの天気が続いている。辺りの雰囲気はとても穏やかであり、つい先ほど散歩がてら行きつけのチーズ屋に立ち寄った。フローニンゲンの街は秋が深まり、冬の足音が聞こえてくるかのようだ。一方で、気温に関しては思っていた以上に低くないことに驚く。一昨年、昨年の今頃はもう少し寒かったように思える。確かにすでにヒーターをつけて毎日過ごしているが、少なくとも今週はそれほど寒くない。寒さがぐっと増してくるのは再来週ぐらいからだろうか。

正味一時間ほどの散歩を楽しむことによって、良い気分転換が図られたように思う。特に帰り道に関しては、普段あまり通らない道を意図的に選び、新鮮な気分を味わった。慣れ親しんだ道から外れ、新たな道を歩いてみるというのは良い刺激となる。それはそっくりそのまま人生にも当てはまるように思える。

散歩の最中、自分はあと何回この道を歩くことができるのかを考えていた。そろそろ私は、人生の新たな道を歩く時期に差し掛かっているように思う。

オランダで三年間暮らすことによって、この国の持つ落ち着きをひどく気に入っている自分がいることに気づく。だが、慣れ親しんだこの国を去って、また別の国で新たな生活を営んでいく必要性を感じる。それは多分に「必要性」であり、同時に「必然性」でもあるのだと思う。来年はアメリカかスイスで暮らすことになるだろう。おそらくその地では数年間ほど過ごすことになる。その土地でしか涵養しえぬものを涵養したら、再び私は新たな地に向かうだろう。そのようなことをぼんやりと考えていた。

昨日に引き続き、今日も午前中から、来年の一月に出版予定の書籍の原稿のレビューを行っていた。いよいよあと少しでレビューが完了する。残りの箇所を読み、自分が執筆したコラムに加筆修正をすれば完成であり、完成原稿を今日中に協働執筆者の方に送ろうと思う。原稿のレビューが終われば、大学院に提出予定の志望動機書のレビューを行い、スコットランド人の友人のカルムにレビューを依頼する。それら二つが終わったら、今夜は芸術教育の哲学に関する書籍を注文しようと

思う。冬が本格的に到来する前にそれらの書籍を購入し、冬が本格的にやってきたら、それらを読み進めていこうと思う。フローニンゲン：2018/11/9（金）16:02

No.1398: On A Silent Dark Night

It is 5PM now, and the outside world became completely dark. I can hear sounds of splash of water that cars driving the street make. Groningen, 17:35, Saturday, 11/10/2018

3377. 二つのレビューの完成

一つの人生における、ある一つの金曜日が終わりに近づいている。この日記を書きながら思ったのは、今日は金曜日であったということだ。明日からは週末を迎え、平日とは異った雰囲気がこの町を包むだろう。

時刻は午後の七時半を迎えた。今日も本当に一日が充実していたと心の底から言える。もう心の底にまで充実感が染み渡り、心全体が充実感と一つになっている。

今日は午前中より、現在執筆中の書籍の原稿のレビューを行い、散歩から戻ってきた夕方に全てのレビューを終え、夕食前に協働執筆者の方に原稿を送った。あとは協働執筆者の方に最終確認をしていただければ、最終原稿が完成することになる。編集者の方からの手直しを受けて、こちら側の修正がどれほど必要なのか未知な部分もあるが、修正が必要な箇所はそれほど多くないだろう。

書籍のレビューを終えた後、大学院への出願に向けた志望動機書のレビューを行い、スコットランド人の友人にそのドラフトを送った。この志望動機書に関しては、練りに練り、推敲に推敲を重ねたため、今回のレビューではほとんど修正箇所がなかった。その友人にレビューを依頼したのは、内容面に関してではなく、ネイティブの観点から見て文法的な誤りや、言葉の用い方におかしな箇所はないかどうかという点についである。友人がどのような点を指摘してくれるのか楽しみである。

振り返れば、私は欧米の大学院の三つの修士プログラムに応募してきた経験上、志望動機書を執筆するのは今回で四回目である。今回は結局、ハーバード大学教育大学院だけに出願しようと思っており、これまでと同様に、志望動機書はとりわけ重要なものになる。そうしたこともあり、今回ネイティブの友人にレビューを依頼した。ちょうど友人の学期末試験が終わったタイミングを考慮してドラフト

を送り、再来週の月曜日までにレビューをしてもらうように依頼をした。どのようなレビュー結果が返ってくるか、今から楽しみである。

今日はこれから、本日最後の作曲実践を行う。早朝にはバッハに範を求め、午後にはテレマンに範を求めた。本日最後の作曲実践では、ハイドンに範を求めようと思う。

絵画作品と同様に、一つの曲には必ず作者の意図が込められている。作者が一つの絵画作品に込めた意図を理解するのは難しく、それは曲においてもそうだろう。だが、そうした意図をできるだけ理解したいと最近強く思う。今から参考にする曲の中に、ハイドンは一体どのような想いを込めたのか。そうした問題意識を持ちながら曲を参考にしていく。

今後は、「楽想理解」というものをテーマに掲げたい。一粒の砂に宇宙を見ることが可能であるのなら、一つの曲に宇宙を見ることも当然可能なはずだ。ハイドンは、今から参考にする曲の中にどのような宇宙を表現しようとしたのだろうか。また、その曲を参考にする形で自分が生み出した曲は、自己のいかなる側面の宇宙を表現したものなのだろうか。フローニンゲン：2018/11/9（金）19:51

No.1399: Jovial Steps

I'll go to bed early for tomorrow. Groningen, 20:50, Saturday, 11/10/2018

3378. 歓喜の表現で目覚める夢

今朝は六時を少し過ぎた頃に起床した。今、突然小雨が降り出し、窓ガラスに雨がぶつかる音が聞こえ始めた。今日と明日は、どうやら雨に見舞われる時間が多いようだ。

起床してから30分ほどが経ち、改めて今朝方の夢について思い出している。夢の中で私は、実際に通っていた中学校の体育館の中にいた。どうやら体育の時間なのか、あるいはスポーツフェスティバルか何かの時間なのか、私は体育館でフットサルの試合に出場していた。体育館全体は少し薄暗かったのだが、試合が白熱をしているためか、熱気を感じられるような雰囲気が漂っていた。もちろん私の同級生も何人か試合に参加していたが、敵味方問わず、そこにはブラジル人やアルゼンチン人もいた。いくつかの国籍が入り乱れる形で試合が行われていた。

その試合に参加している人たちは、どうやらサッカーの経験者なのだが、フットサルはあまりしたことがない様子だった。ボールの扱い方がサッカー的であり、フットサルに固有の動きはほとんどできないようだった。少しばかり時間を使って、敵味方の選手たちの特徴を私は観察をしていた。その後、この試合が何かしらの重要性を持っていることに気づき、観察結果を基にして、私も本気でプレーをするようになった。

その場には、おそらくプロのサッカー選手もいたと思われるが、私は、彼らが呆れてしまうぐらいにゴールを重ねた。試合の途中に、一試合に七ゴールを過去に決めた選手がそこにいると聞いていたので、最低でも八ゴールを自分が決めようと思っていた。

得点を決めるたびに、すぐにボールをコートの中央に置き、相手にすぐに試合を再開するように無言で要求している自分がいた。試合が再開されるや否や、すぐに相手のボールを奪取しにプレスをかけ、奪ったボールをゴールまですぐに結びつけるということを繰り返していた。

そういえば、その試合が始まる前に、私は友人とシュート練習をしていた。彼はサッカー部に所属しており、サッカーの技術は巧みなのだが、フットサルに固有の技術については習得をしていないようだった。私は彼の特徴として、アシストが上手く、逆にあまりシュートを積極的に打たない人間だと知っていたのだが、彼はシュートの技術も高いと私は密かに思っていた。これから始まる試合においては、おそらく彼のシュートからの得点が重要になると思った私は、何気なく彼に言葉をかけた。

私:「相手陣内に一歩足を踏み入れたら、もうそこからはシュートレンジだよね？いや、相手陣内の一歩手前の、こちらの陣内からでも十分にゴールを決めれると思う」

友人:「えっ？ちょっと遠くない？」

私:「いや、全く遠くないよ。こうした距離からシュートを打つと、相手のキーパーは随分と嫌がると思う。それに、打たないシュートはゴールにならないしね」

友人と私はそのようなやり取りをしながら、試合が始まる前にシュート練習をしていた。試合の中でその友人がどれだけシュートを打ち、どれだけゴールを決めたのかは定かではない。それ以上に私は、自らがゴールを決め続けることだけに没頭しているようだった。

数分間で立て続けにゴールを決めると、相手の選手たちは唖然とした表情を浮かべていた。私はサッカーのプロでもなく、フットサルのプロでもないのだが、相手にプロのサッカー選手が何人もいることを知っていたためか、表向きの表情は至って冷静なのだが、自分の内側には強いエネルギーが芽生えていることに気づいていた。

日本人、ブラジル人、アルゼンチン人などが混じる中、私は自分のプレーを続け、相手の選手たちの表情が唖然としたものから絶望に変わるまでゴールを決め続けようと思っていた。八ゴール目を決めた時、歓喜で雄叫びを上げ、そこで夢から一度覚めた。

寝室のベッドの上には、左胸を何度も叩いている自分がいた。それは夢の中で八ゴール目を決めた際に行っていた歓喜の表現だった。フローニンゲン:2018/11/10(土)07:18

No.1400: Autumn Elasticity

Although it is raining now, I can feel the elasticity of autumn. I'll begin today's academic work from now. Groningen, 09:02, Sunday, 11/11/2018

3379. 夢の振り返り

雨がしとしとと降り注ぐ土曜日の早朝。時刻は午前七時を迎え、これから徐々に明るくなっていく時間帯となった。辺りはまだ闇に包まれているが、遠くの空がダークブルーに変わり始めている。確かに今日の天気は優れないが、それでも今日という一日が充実したものになることを予感する。

早朝の夢について再び振り返っている。特に夢の中での自分の行動や感情に注目をしていると、少しばかり気づくことがあった。

夢の中の自分は、時に極端な行動に出ることがある。今朝方の夢で言えば、相手選手が唖然としていることを一切気にかけることなしに、ゴールを奪い続けることに意識を向けている自分がいた。ここで注目をしていたのは、相手にはプロのサッカー選手が混じっていたこともあり、何か自分よりも大きさ存在に立ち向かっていく自分が夢の中では頻繁に見られることに気づいた。しかもその際には、その大きな存在が完全に打ちのめされるまで何かの行動を取り続けることが共通している。そう

した行動を生み出す背景には、自分の中に何か度を越したような発想、常軌を逸した発想が芽生えていることに気づく。

今回の夢で言えば、相手チームの中に、一試合に七ゴールを七試合連続して決め続けていた選手がいるという話を聞いており、周りは驚いていたが、なぜそれに驚く必要があるのか私には理解できず、少なくとも一試合に八ゴールを七試合連続して決めるか、もしくはその選手が七試合で合計49点入れたのであれば、次の一試合の中だけで49ゴールを決めれば、その選手が成し遂げたことが何ら驚くべきものでもないことがわかるのではないか、と思っていた。私は一試合に49ゴールを決める方を選択するのではなく、今回は八ゴールを決める方を選択した。

多くの人は、極めて限定的な範囲で現実を捉えているように思えることがある。夢の中の私はどうやら、そうした狭い発想の枠組みによって生み出された現実認識を変えることができるということを示すために、非常に極端な行動に乗り出すことをしていると見えなくもない。

そういえば、一度夢から目覚めた後、そこから再び眠りについた時、その夢の続きを見ていた。フットサルの試合が終わった後に、私は友人と共に、学校に併設しているレストランでご飯を食べることにした。レストランには、様々な種類の寿司や串類が並んでいた。その日の夜に寿司を食べることを知っていたので、私は寿司類を避け、串類を中心に食べ物を選んでいった。

私の友人が先に会計を済ませようとすると、店員が変わった箱を差し出し、それに食べ物を入れる必要があると述べた。見ると、このレストランの店員は皆中国人であった。箱の中を見ると、店員がお勧めとして詰めた食べ物が少しばかり入っていた。おそらく空の箱もちゃんとあると思ったため、私は英語で“Do you have an empty box?”と尋ねた。すると、親切そうなその店員は、笑顔で流暢な英語で返答をし、空箱を私に渡してくれた。私はその箱を友人に渡し、もう一つ自分用に空箱をもらった。

友人が会計をし始めた時、私はまだ食べ物を選んでいた。うなぎの蒲焼が美味しそうだったので、それを空箱に詰め、その他にも串類をいくつか選んでいった。すると、私は間違って、会計を済ませていないにもかかわらず、一本ほど何かの串を食べてしまった。後ほどその串の分もきちんと支

払いを済ませようと思いながら、白身魚の握り寿司が輝いて見え、それを取ろうかと思ったが、結局それを取らずに会計に向かったところで夢から覚めた。フローニンゲン：2018/11/10（土）07:42

No.1401: An Autumn Crescent

It's 6PM now. It became dark outside. I can see a crescent in the night sky. Groningen, 17:59, Sunday, 11/11/2018

3380. ベルギー訪問計画の芽生え

時刻が午前七時半を過ぎた頃から、辺りが明るくなってきた。今、外が明るくなっていく様子を眺めている。今日は一日中雲が空を覆い、時折雨が降るようだ。雨のおかげか、気温はそれほど低くない。最高気温は13度、最低気温は9度とのことである。先々週あたりに、最低気温が0度になる日もあったことを考えると、今は比較的暖かい気候だと言える。来週からは、最高気温に関しては12〜13度、最低気温に関しては5度前後の日が続くようだ。

昨日ふと、春になる前か春を迎えてから、一度ベルギーに旅行してみようと思った。以前友人から、首都のブリュッセルよりも、アントワープの方が魅力的な都市だったという話を聞いていたが、自分はどのような印象を受けるのかを確かめるために、両都市に数日間ずつ滞在してみようという考えが昨日起こった。

オランダとベルギーは隣接しており、近いのであるから、ベルギーには以前から足を運んでみたいと思っていた。フローニンゲンからでも電車で三時間半ほどで到着できる距離だ。春の前後にベルギーを訪問し、その町並みや各都市にある美術館を堪能しようと思う。

昨夜就寝前に、今日という一日が一筋の光のようであり、その光の残り香が辺りに立ちこめているかのような感覚を持った。毎日は常に光なのだ。そのようなことを昨夜考えていたことを思い出す。今日もそうした光のような一日になるだろう。

昨日に書籍の原稿と大学院に提出する志望動機書のレビューを終えたこともあり、今日は一日中自分の望む探究活動と創造活動に時間を充てようと思う。今日は久しぶりに、早朝の作曲実践の中で、ショパンの曲を参考にしたいと思う。すでに昨夜からそれを考えており、就寝前に、書見台に

ショパンの楽譜を開いて置いていた。参考にする曲も昨夜の段階ですでに決まっていたから、今日はまずその曲に範を求めて作曲実践をする。

作曲実践がひと段落したら、ケン・ウィルバーの“The Eye of Spirit: An Integral Vision for a World Gone Slightly Mad (2001)”を読み進めていく。一昨日と昨日を通じて、注記の一読が済んだため、今度は本文を読んでいこうと思う。本文に関しては今回が二読目であり、以前に読んだ時から随分と日が経っているので、また新たな気づきや発見が得られるであろうことを楽しみにしている。その書籍を読んだ後、ウィルバーの別の書籍を読むかどうかはまだ決めかねている。

それよりも、ウォルター・ピストンが執筆した、ハーモニーに関する書籍“Harmony (1978)”を最初から丁寧に読み進めていこうかと思っている。今日は休日であるから、芸術に関する文献をゆっくり読むことを行ってもいいかもしれない。いずれにせよ、本書は必ず最初から最後まで一度丁寧に読み進めていこうと思っている。

その他には、昼食後と夕食後の時間を使って、芸術教育哲学に関する書籍を15-20冊ほど、イギリスかドイツのアマゾンに注文する。フリードリヒ・シラー、スザンヌ・ランガー、エリオット・アイスナー、マキシン・グリーンらが執筆した主著に関しては、一通り全てを読みたいと思う。フローニンゲン：2018/11/10（土）08:10